

ごあいさつ



松山市文化協会会長
土居 英雄

みずみずしい新緑の好時節、多数の皆様をお迎えして「第26回二之丸新能」を盛大に開催できますことは、松山市文化協会といたしまして大きな喜びでございます。また、開催に当たり、御尽力を賜りました公益社団法人愛媛能楽協会をはじめ関係の皆様、厚く御礼申し上げます。
能楽は、室町時代に世阿弥がその芸術性を確立して以来、永い時間の流れの中で層層かれ、日本の伝統芸能として現在まで継承され、大変格調の高い芸術として世界に誇れる文化でございます。
松山におきましても能楽は、江戸時代に武家の式楽として栄え、二之丸、三之丸に逸品の能面や能衣装を備えた能舞台を有するほどになるとも、町方にも広く普及し現在まで松山の特色ある伝統芸能として継承されているのでございます。
今回の演目である「子規」は、子規・漱石生誕150年を記念して上演されます。今宵は、松山城の石垣を背景に、かがり火に映える幽玄の世界に浸り、謡や囃子の心地よさ、舞の動きとともに今も昔も変わらない人間の思いなど、皆様方それぞれが自分なりの感性で、能楽の魅力を堪能していただければ幸いです。
最後に、今後とも松山市文化協会の活動に御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

ごあいさつ



松山市長
野志 克仁

風薫る5月となり、今年も二之丸新能が開催される季節になりました。二之丸新能は今回で26回目を迎え、多くの市民の皆さんに親しまれています。このように、新能が松山の代表的な文化行事の一つとして定着しているのは、御出演の公益社団法人愛媛能楽協会をはじめ、主催の松山市文化協会など関係者の皆様の御尽力のおかげであり、深く感謝申し上げます。
能楽は、武家の式楽として保護され、松山藩でも隆盛し、町方にも広く普及しました。正岡子規の叔父、藤野漸は、全国的な能楽の危機を乗り切り、本市で再興させた人物です。また、子規の親友の夏目漱石も、自宅で謡を謡ったり、勤務先の帝国大学で西洋人教授を能楽鑑賞に誘ったりと、能楽に造詣がありました。
今年には、子規・漱石の生誕150年を迎えます。松山市では、子規と漱石が俳句をはじめ文学の革新と創造を志したことを、市民の皆様にも実感していただくために、様々な記念事業に取り組んでいます。今回の新能でも、金剛流能「子規」が最終演目になっており、記念の年を盛り上げていただけでもと大いに期待しています。
皆様には、かがり火のゆらめく幻想的な雰囲気の中、日本を代表する子規・漱石という二人の文豪が松山で共に暮らしていたことをしのびながら、情深な情態を心行くまで味わっていただけることを願い、私からの挨拶とします。

子規・漱石生誕百五十年記念事業
第二十六回 二之丸新能

平成二十九年五月十日午後六時始め
松山城二之丸史跡庭園内特設能舞台

能組

舞囃子(親世流)

胡蝶 日浅 敏子

大鼓 岡本 靖
小鼓 山本 千ヨ力

太鼓 山岡 ミツキ
笛 一宮 教伸

地謡 日下 敬
大久保 千保子

白石 千鶴
大亀 藤英
徳本 泰子

舞囃子(喜多流)

井筒 天野 小苗

大鼓 早田 サチ子
小鼓 丹下 紀香

笛 西山 美穂子

門屋 庸夫
金子 匡一
金子 敬一郎
佐賀 博

狂言(大藏流)

惣八 料理人 古川 道郎

有徳人 佐々木 泉
出家 谷本 満也

後見 古川 喜朗

(火入れ式)

舞囃子(宝生流)

半部 結城 千恵美

大鼓 早田 サチ子
小鼓 丹下 紀香

笛 一宮 教伸

宮内 眞子
石黒 実都
岡田 康子
乗松 克子

能 (金剛流)

シテ 宇高 通成

子規 宝生 欣哉

大鼓 谷口 正壽
小鼓 曾和 正博

太鼓 前川 光範
笛 左鴻 泰弘

後見 宇高 徳成
豊嶋 幸洋

地謡

城戸 敬考 眞鍋 清
小野 芳朗 田中 敏文
漆垣 謙次 宇高 竜成
檜垣 孝文 谷口 雅彦

附祝言

終了予定 午後八時半頃